天下ノ悪拷問ヨリ
惨ナルハナシ。
津田真道「拷問論」より
（『明六雑誌』第７号）

歴史の壺

法務史料展示室だより
第26号

「歴史の壺」では、法に関する歴史を中心に様々な視点で紹介していきます。みなさんも歴史のつぼにはまりましょう！

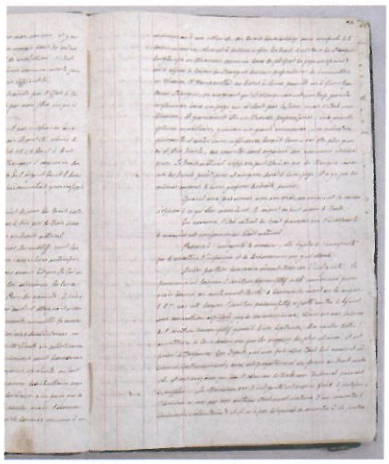
法務図書館の書棚から

第11回『性法講義筆記ノート』

明治初期、外国知識吸収のためわが国が雇用した、いわゆるお雇い外国人の一人ボアソナアドは、旧民法・旧刑法等の編纂といった立法事業での功績が特に注目されがちですが、政治外交の顧問としても尽力し、併せ法学教育の担い手として、明治の日本に大きな足跡を残しました。

ボアソナアドは、明治6年(1873)11月、日本政府より法学教育・法典編纂のため招聘されて、来日しました。翌年、フランス語・フランス法教育を行う司法省明法寮の教師となり、性法及びフランス法の講義を担当しました(ここに言う性法とは自然法のことで、ナポレオン法典などに強い影響を与えた、人間の理性に基づく普遍的・恒久的な法とそれに関する考え方のことを言います)。その際に、明法寮の学生であった関口豊によって筆記されたのが、この『性法講義筆記ノート』です。

『性法講義筆記ノート』



関口豊のノートの表紙には"Cahier Du Droit naturel"と記されており、その中は全てフランス語で筆記され、ボアソナアドの講義が全てフランス語で行われたことを伝えています。また、当時の明法寮の学生が、いかに優秀で勤勉であったかを物語る、重要な史料であると言えるでしょう。関口は明治5年(1872)に入学した明法寮一期生の一人で、寮内で行われた学力によるクラス分けでは、上級クラスに所属していました。やがて、司法省が決定したフランス留学生7名の１人にも選ばれるなど優秀な人物として知られましたが、パリで客死し、その力を近代日本法史に残すことはありませんでした。

またこのノートは、井上操の手によって明治10年(1877)6月に『性法講義』として刊行されました。井上は明治7年(1874)に明法寮に入って関口とともに学んだ人物で、卒業後は司法省に出仕し、また明治法律学校で治罪法(刑事訴訟法)の講義も担当しました。明治19年(1886)に東京大学教授となりましたがまもなく判事となり、同年7月、大阪事件(大井憲太郎を中心にした、自由民権運動の激化事件)を裁くため大阪控訴院評定官へ異動し、関西法律学校(現在の関西大学)設立などにも力を尽くしました。しかし、明治26年(1893)の雪の日に落馬して執務不能となり、悲運の後半生を送りました。

司法省明法寮は、司法省法学校と改組され、明治18年(1885)には東京大学法学部に吸収されますが、それまでの間、司法官養成機関として重要な役割を果たしていました。また、ボアソナアドは明治法律学校(明治大学)や和仏法律学校(法政大学)でも教壇に立ち、多くの学生たちに最先端の法学教育を施していきました。これらの学校を巣立った卒業生たちは、明治から大正にかけて、日本の司法界にその名を残すことになります。

＊「法務図書館の書棚から」では、法務図書館が所蔵する各種史料・図書のなかから毎回一点をとりあげて、様々な切り口で紹介します。

字引をひもとく

下手人：ゲシュニン

時代劇のなかでよく、「下手人は誰だ」などというセリフがあるように、下手人とは、「犯人」という意味が一般的です。この言葉は古く、中国の「律」にみられる法律用語でした。その後、日本に渡り一般用語として定着、江戸時代には死刑の一種として下手人という刑罰が設けられます。下手人は、処刑後の遺体が様者（ためしもの）（試物）に付される死罪よりも一段軽い刑罰として適用されました。「死」を連想させるこの言葉は「下死人」または「解死人」とも記し、時代によって「ゲシニン」とも読まれます。

史跡探訪

国会期成同盟発祥之地

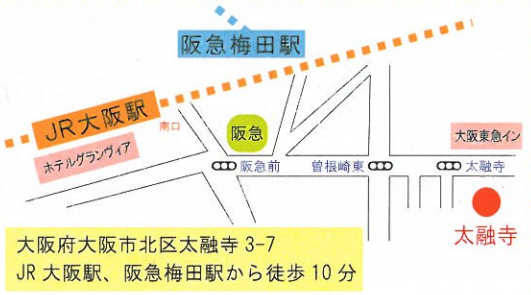
夫れ国会を開設するは、国家の大に緊要なる所にして、今日の最も急務たり。吾輩国民たる者安んぞ之を謀らざるを得ん哉。蓋吾輩の今茲に大阪に会して、国会を開設するの允可を願望する也、素より深く国会を望むに因れば也。（板垣退助監修『自由党史（上）』）

明治１３年（1880）３月、自由民権運動の牽引者たちが、大阪は北野の太融寺に集います。その顔触れは、のちに衆議院議長を務める片岡健吉、福島事件で捕えられる河野広中、私擬憲法『東洋大日本国国憲按』の起草者として知られる植木枝盛など、日本の憲政史にその名を残す面々でした。４月９日にかけて行われた議論の結果、国会の早期開設を願う国会期成同盟が結成され、冒頭の一文に始まる「国会期成同盟規約」が認められます。

当時の日本には国会がなく、人々は自らの政治的意見を反映させる機関の設立を待ち望んでいました。時の政府は、そうした主張を声高に唱える人々の影響力を削ぐため、「集会条例」などの法令を出して沈静化を図りますが、効果は上がりませんでした。結果、人々の要求は政府部内をも動かし、翌１４年（1881）には、将来の国会開設を約した勅諭が出されることになります。

現在、太融寺の境内に設けられている石碑（写真）は、ここが日本の憲政史を彩る舞台の一つであったことを示しています。

国会期成同盟発祥之地碑



歴史の壺クイズ

江戸中期、幕府は利子付・無担保の金銀貸借については訴訟を受け付けないとする「相対済令」をたびたび発布します。

制定の理由もあわせて明記されましたが、その要点は以下のうちどれでしょうか。

1. 訴訟の数が多くて処理できなかったから
2. 訴えの多くが親族間のトラブルであったから
3. 法廷を開いても債務者がなかなか出頭しなかったから

前回の答えは3番！

描かれた法

高橋作左衛門景保は文化文政期の天文学者、地理学者であり、父至時の跡を継いで幕府天文方に任じられました。伊能忠敬、間宮林蔵らによる全国測量事業、その集大成である『大日本沿海輿地全図』、いわゆる伊能図の作製を監督し、その後も蛮書和解御用、書物奉行兼天文方筆頭を勤めた有能な官吏です。しかし今日、彼の名は様々な功績によってではなく、シーボルト事件の主犯、国禁を犯した大罪人として正史に刻まれています。本書は緻密な考証を基に、高橋景保の事績から悲惨な末路までを活写した伝記小説です。

オランダ商館長に従い江戸に至ったシーボルトと交流を持った高橋は、樺太周辺の地理的情報を求め、見返りに高橋自らが書写した大日本沿海輿地全図の縮図をシーボルトに送りました。鎖国を国是とする当時、日本地図は第一級の禁制品です。通説では、離日を前にしたシーボルトから高橋と間宮林蔵に小包が送られ、間宮が支配向きに届けたことから、高橋とシーボルトとの私的な交流が明るみに出ました。文政11年（1828）、高橋は捕縛され、その供述からシーボルトにも捜査が及び、やがて日本御構、すなわち国外追放処分を受けます。一方高橋は捕縛から数月を経ず獄死しますが、大罪ゆえ遺骸は一切の調べが終わるまで塩漬けにされ、一年の後、「存命に候えば死罪」との申し渡しを受けて遺骸の首を打たれたのです。

本書では、隠れキリシタンを伏線に物語としての広がりを持たせつつ、真理を求める純粋さ故に禁を犯していく学者高橋の悲劇を描き出しています。

発行：法務省大臣官房司法法制部　監修：慶應義塾大学法学部教授 霞信彦　製作スタッフ：原禎嗣　神野潔　児玉圭司　三田奈穂　デザイン：熊谷薫子 DesignStudio